

ふるさとワーホリ若者 × 只見のキーパーソン 「只見で見つける”場づくり”のヒント」



ふるさとワーキングホリデーで只見町に滞在していた文哉さんと、只見町で地域振興活動に力を入れている町のキーパーソン公栄さんによる特別な対談が実現しました。

地域活性化や地域づくりに興味のある方にとって、きっと参考になる内容だと思います！
只見町で生まれたリアルな対談の様子を、ぜひご覧ください❀

テーマは“場づくり”

ーお二人の紹介

文哉さん（以下文哉と記載）

ふるさとワーキングホリデー制度を利用して、2週間只見町に滞在。森林の分校ふざわで働きながら、町の暮らしを体験。
将来「場づくり」を仕事にしたいと考えている。

公栄さん（以下公栄と記載）

只見町生まれ只見育ち。
高校卒業後、若松市内のホテルに勤務。2001年に地元に戻り、共栄に入社。
2019年に先代社長が亡くなり、一念発起し事業を承継、新・共栄を創業。
地域振興活動にも力を入れ、イベントの開催などの場づくりに取り組んでいる只見のキーパーソン。

（移住コーディネーター藤沼も同席、以下藤沼と記載）

一文哉さんがワーホリで探す「場づくり」とは？

藤沼：文哉さんは、どのような形で「場づくり」に携わりたいかイメージはありますか？

文哉：漠然と「場づくり」をする仕事がしたいと思っているのですが、「場づくり」にはどんな方法があるのか、人生経験が浅くてわからないことも多く...

そこで、ふるさとワーキングホリデーで地域の仕事や地域との交流、そこでの暮らしを通して、どんなことが自分のやりたいことに近いのか、どんな方法があるのかを探っている段階です。

藤沼：地域づくりにも繋がる「場づくり」はたくさんの形があるので、いろいろな場所に足を運び、たくさんの人と出会って交流する中で、自分に合った「場づくり」が見つかるといいですね。今日の対談も、そのヒントのひとつになれば嬉しいです。

一公栄さんが携わってきた「場づくり」とは？

文哉：地域振興のためにイベントの開催などの場づくりもされているとお聞きしましたが、これまでにどのようなイベントに関わってこられたのか、お伺いしてもいいですか？

公栄：どこの市町村も悩んでることだと思いますが、只見町にとって一番のネックはやっぱり「人口減少」だと思います。

でも、イベントがあると人は集まってくるんですよ。イベントで町を盛り上げようという思いで立ち上がった有志の集まりがあって、JR只見駅前「ただみ駅前夜市」というイベントを定期的開催しています。

私もその中の一人として関わっています。

現在のメンバーは12人ほど。特に役割分担は決めてなくて、それぞれがやりたいことを自由にやっている感じです。

やりたいことをやる、好きなことをやるというのがこのイベントの趣旨なんです。飲食の屋台を出す人もいれば、編み物が好きな人はハンドメイドの雑貨を売る屋台をやったりと、みんな思い思いに楽しんでいます。

その他に、私は商工会青年部にも入っていて、町でイベントがあるとそちらでも活動しています。

例えば、9月にある「三石神社祭り」で、子供たちに三石神社の由来を説明したり、ビンゴゲームをしたりしています。

また、2月に開催される県内最大級の冬のイベント「只見ふるさとの雪まつり」にも参加しています。



公栄：イベントに携わる人って決まったメンバーになりがちなんですよ。そこにどうやって新しい人を巻き込んで、もっと盛り上げていくかというのが課題です。

どこの町にも「この町をなんとかしたい」と思ってる人はいると思うんです。私もずっと只見にいて、人口が減っていくのも、若い人が少なくなっていくのもずっと見てきて、だからこそ何とかしたいと思って活動しています。

でも、どれだけ思いがあっても、一人ではやっぱり難しいんですよ。町内の人、移住してきた人もみんなで盛り上げないとイベントは広がっていかないと常々感じています。



一人口減少の打開には何が効果的？

文哉：実際に、一発でこれだ！という人口減少打開策は無いんじゃないかなと感じています。公栄さんは今までの取り組みを通して、人口減少の打開には何が効果的だとお考えですか？

公栄：只見町というブランドを背負って、もっと他の地域に出るしかない。それができる営業力、営業する人が只見町には現状足りていないと感じます。

只見町って実はとてもクオリティが高いんです！山はある、川はある、町内の人しか知らない遊ぶところがたくさんある！観光の窓口で基本的なことは教えてもらえるけれど、そこから一歩踏み込んだところが本当に面白い！

私は、只見で暮らしていて暇だと感じることは無いんですよ。例えば、私は毎週川へ魚捕りに行くんです。子どもたちも連れて行って、一緒に魚を捕って、さばいて焼くところまでやります。火起こしも全部自分たちでやるんですよ。そんな楽しみを川に入れなくなる季節まで毎週続けています。

公栄：山が好きな人は毎週山に行くし、楽しい場所はすでにたくさんあるから、あとはいかに人を引っ張ってくるかだと思うんです。

町外から人が来るようになれば、その中から只見町を気に入って「移住してみようかな」と思う人も出てくると思います。

文哉：確かに県外から初めて只見町を訪れてみて、こんなに山も川も近いところって滅多に出会えないと感じました！

県外から来た人たちが町の魅力を知って、それを広めてくれるのは本当に大切なことですよね。



一県外から来た人にやってもらいたい「場づくり」への関わり方は？

文哉：外から来た人間が、その地域の「場づくり」に携わる場合に、何か求めることはありますか？

公栄：まず、文哉くんの趣味はなんですか？

文哉：7年間音楽をしていて、軽音楽のサークルでギターボーカルをしていました。音楽を聞くのも好きですし、やるのも好きです。

公栄：外から来た人に何をやってもらいたいかっていうと、自分の趣味をこの町で広げていくことかなと思います。

例えば文哉くんなら、音楽が好きな人で集まってバンドを組んでイベントで演奏してもらったり、町内の若者が定期的に集まる会でギターの弾き方講座をやってみたり...

自分の得意なことをたくさんの人に伝えていってほしい。
個々の強みが育っていくとそれが町の強みになっていくと思うんです。

—さいごに

お二人とも「場づくり」への熱い思いを持っていて、お話を伺いながらたくさんの刺激をいただきました。

文哉さんがふるさとワーキングホリデーで只見町に来てくれたからこそ実現したこの対談が、これから「場づくり」という夢に向かって踏み出すきっかけになればとても嬉しいです。



2025.7.15